

千日手の小部屋

月島しいる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

美人な先輩が部活に入ってきた。

幼馴染二人だけの世界が壊れた。

1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
66	60	54	48	43	37	31	26	21	16	11	6	1

目次

1話

「今年も誰も来なかったね」

部室に陽気な声が響く。

俺は憂鬱な気分で手元のチラシを見下ろした。

新入部員募集、と書かれた勧誘用のチラシは殆ど減っていない。

勧誘を試みたものの大半の人は受け取ってもくれなかった。

「まあ、一人きりでも良いじゃん」

対面に座る幼馴染の霧香は、この将棋部の惨状を気にした風もなくそんな事を言う。

「ほら、もっと私も練習するからさあ。元気だしなよ」

一年の時に立ち上げた将棋部は、数合わせの幽霊部員を除けば俺と霧香の二人しかいない。

もっと正確に言うとな霧香は義理で付き合ってくれているだけで、実質的な部員は俺一人だけだった。

椅子から立ち上がり、窓から外を見下ろす。

校庭には見学らしき一年生の姿がちらほら見えた。

「外は賑やかだねえ」

霧香は他人事のように笑って、じゃらじゃらと駒を並べ始めた。

「一局やる？」

「……ああ」

窓から目を離し、席に戻る。

並べられた俺の陣地には、飛車と角がない。

「もっと上手くなるからさ、私。それで我慢してよ」

霧香はそう言って、駒を動かし始めた。

きつと励まされているのだろう。

俺は小さく息をついて、言い訳がましく口を開いた。

「現状に不満があるわけじゃないよ」

今の時代、ネットを使えばいくらでも対局出来る。

部活として将棋をやる必要性はそれほどない。

俺はただ、同じ趣味を持つ友人が欲しいだけだ。

霧香はどんどん上手くなっているが、心から将棋が好きなのわけではない。だから部活以外では将棋の話をあまりしないように気をつけていた。そういう遠慮のいらぬ友人に昔から憧れがあった。

「じゃあ今のままで良いじゃん。私は今の部室、好きだよ」

霧香の手が、将棋盤の横に置かれたお菓子に伸びる。

「中途半端に仲のいい人とか、友達友達とか、そういう気を遣う存在がいなくてさ」

ぷらぷらと揺れる霧香のつま先が、俺の足先に触れた。

「派閥とか誰かの悪口もなくて、面倒なボスみたいなのもいなくてさ」

霧香の目が盤面から離れ、俺に向けられる。

「竜也と私しかないこの時間、私は凄く好きだよ」

いつもの少し茶化した様子ではなく、真剣な声色だった。

指そうとしていた手が、自然と止まった。

「だからさ」

霧香の目は、盤面を見ていない。

吸い込まれそうな目が、将棋盤の向かい側から俺に向けられていた。

「今日はね、別に誰も来なくてもいいかなって思ってたんだ」

一瞬の沈黙。

霧香はそこで表情を緩め、穏やかに微笑んだ。

「竜也はさ、このまま私と二人きりだと嫌なわけ？」

「……いや、そういうわけじゃないよ」

いつもと雰囲気の違い霧香に吞まれそうになり、喉から絞り出すように答える。

校庭から届く運動部のかけ声が、遥か遠くに感じられた。

「だったらさ、新入部員募集のポスター剥がしちゃおうよ」

どこか冗談っぽく言う霧香の目は笑っていない。

勝ち気な印象を与える大きな瞳が、同意を求めるように俺を見ていた。

「もう一年、二人だけで過ごそうよ」

霧香が身を乗り出し、将棋盤が僅かに動く。

甘いお菓子の匂いに混じって、霧香が使っているシャンプーの香りがした。

「それは……」

逡巡の言葉が口から飛び出した。

それを塞ぐように、霧香が口を開く。

霧香の白い肌に、朱が差しているように見えた。

「ちよつと分かりづらいかな。つまり、私と——」

ノックの音がした。

霧香が弾かれたように立ち上がり、後ろを振り返る。

開いた扉の向こうに、一人の女生徒が立っていた。

「……将棋部はここで間違いないか？」

「……はい」

突然の来客に驚いて、返答がワントンポ遅れる。

その間に女生徒は部室内に足を踏み入れ、辺りを見渡した。

「顧問の先生からは部員が五人いると聞いていたが……」

「他の三人は幽霊部員です」

女生徒の胸元を確認しながら答える。三年生である事を示す赤色

のタイが付けられていた。

「先輩は……どういったご用件ですか？」

「見学だよ。三年生が来るのは珍しいかな？」

「どの学年でも珍しいです。まだ一人も来ていないので」

先輩はおかしそうに笑って、近づいてくる。

彼女の視線は将棋盤へ向かっていた。

「飛車角落ちか。君の方が強いのかな」

「あ、えっと、やりますか？」

霧香が立ち上がり、席を勧める。

「途中じゃないのか？」

「いえ、あの、暇つぶしだったので」

先輩は少し考え込んだ後、では、と椅子に腰掛けた。

「将棋歴はどれくらいなんだ？」

駒を並べ直しながら、先輩が観察するように見上げてくる。

「小さい時から祖父とやっっていました」

「私と同じようなものか。平手で私が先手でいいかな？」

「はい」

先輩が指し始める。

綺麗な指し方だった。それだけで相当指し慣れているのが分かった。

しばらく駒を指す音だけが響いた。

外からは相変わらず運動部の掛け声が聞こえてくる。

「……部活は、毎日やっているのか？」

不意に先輩が沈黙を破った。

顔をあげると、先輩は真剣な目で盤面を見ていた。

綺麗な長い黒髪と豊かな胸に、一瞬目が釘付けになる。

「……部員がいないので二日に一日程度です」

「そうか」

話している間も先輩は盤面から目を離さない。

きつと真面目な人なのだろう。

「拮抗しているな」

「はい」

棋力に大きな差は見られない。

どっちが勝ってもおかしくない状況だった。

「ふむ」

先輩が息を吐いて考え込む。

寄せの段階に入った。分が悪い。

先輩は容赦なく詰めてくる。

完全に勝ち筋が潰えるのが見えた。

「……参りました」

負けを認めると、先輩はようやく盤面から顔をあげて穏やかな笑みを浮かべた。

「後手なら負けていたかもしれない」

「多分、結果は変わらないと思います」

「そんな事はない。腕が拮抗している相手と指せるのは珍しいもの

だ。とても楽しい時間だったよ」

駒を片付けながら、先輩が言葉を続ける。

「君は対局専門かな？ それとも中継を見たりもするのかな？」

「結構見てる方だと思います。自分で指す事よりも多いです」

「なるほど。私も観戦が好きなんだが、周りに話せる人がいなくてね。

そういう相手を探していたんだ」

そうやって、先輩が手を差し出してくる。

「三年の角田四季（つのだ しき）だ。正式に入部したい」

少し躊躇した後、その手を握る。

想像よりもずっと柔らかい感触が、手を包んだ。

2話

いつも見ていた。

誰よりも近くで、その横顔を見てきた。

自然と視線が彼の姿を追って、目が合うと咄嗟に逸らすのを繰り返した。

きっかけは分からない。

気づけばこうなっていた。

幼少期はいつも一緒だったのに、そのうち手を繋ぐのが恥ずかしくなって、一緒に帰るのも恥ずかしくなって、教室でもあまり喋らなくなっ

て。離れば離れるほど、意識するようになった。

身長は私を遥かに追い越してしまって、いつの間にか声変わりして。

時が経つごとに私達の身体は全くの別物に変わって行って、それが私達の間には壁のようにそびえ立ち始めた。

幼馴染なんて関係はいつまでも続かない。

同じクラスになっても殆ど話せなくなった。

教室で女子たちと雑談を交わしながら、盗み見るように彼の姿を探す。その程度の関係になった。

多分、彼との関係はこのまま切れていってしまうのだろう。

そう思ったから、行動した。

「霧香？」

出来たばかりの将棋部を訪れた私に、彼は驚いた表情を見せた。

「いやあ。最近ボケてきちちゃってさあ。頭の体操しようかなと思っ
て」

冗談っぽく誤魔化しながら、誰もいない教室で久しぶりの会話を楽しむ。

周りの視線がなければ、昔のような関係に戻れる気がした。

まだ私のほうが背が高く、彼は声変わりしていなくて、私の胸も膨らんでいなかったあの頃と同じように。

「ね、やり方教えてよ。竜也って強いんでしょ」
そうやって、私は失われたあの頃の関係を勝ち取ったはずだった。
二人だけの世界を、勝ち取ったはずだった。
なのに。

「昨日の竜王戦は見たかい？」

視線の先には、楽しそうに話す角田先輩の姿があった。
その向かいでは幼馴染である竜也が穏やかな笑みを浮かべている。
そして私は少し離れたところで一人、雑誌をぼんやりと眺めていた。

なぜ、こうなってしまったのだろう。

角田先輩が入部して一週間。

私と竜也の二人だけの世界は、あっけなく崩壊してしまった。

角田先輩は竜也との距離をあつという間に縮めている。

「あ、このお菓子美味しいよ。霧香も食べる？」

竜也が新作のお菓子を指差して声をかけてくる。

将棋の話に交ざれない私に、気を遣っているのが分かった。

それが余計に私を惨めな気持ちにさせて、どうしようもない疎外感が募っていく。

「あ、うん。ありがとう」

作り笑いを浮かべて、雑誌から顔をあげる。

角田先輩が難しそうな顔で盤面を睨んでいるところだった。

「……千日手だな」

「そうですね。仕切り直しでしょうか」

角田先輩と竜也はそう言って、駒を片付け始めた。

私はキョトンとして、疑問を口にした。

「え？ 王手してないよね？ どっちが勝ったの？」

「引き分けだよ。一旦仕切り直しだ」

引き分け。

その意味がわからなくて、言葉に詰まった。

「な、なんで？ ターン制の将棋で引き分けなんてあり得くない？」
「うーん、説明が難しいけど、互いに最善の手を指そうとすると盤面が

永遠にループする事があるんだ。どっちかが折れるまでループし続けると切りがないから、千日手って言って四回同じ盤面が出てくると仕切り直す事になってるんだよ」

「竜也くん、そっちからだ」

竜也の言葉に重なるように、角田先輩が促す。

私は思わず息を止めた。

竜也くん。

角田先輩は、確かにそう言った。

名字ではなく、名前を当たり前のよう呼んだ。

竜也も特に驚くことなく、穏やかな笑みで言葉を返している。

私はぼんやりと、そのやり取りを眺めていた。

まだ一週間だ。角田先輩が入部して一週間しか経っていない。

思わず角田先輩に目を向ける。

長くて綺麗な黒髪と、ぱっちりとした切れ長の双眸。

男勝りな独特の話し方と、それに反するような豊かな胸。

誰もが美人と称するであろう見た目に、得体のしれない不安感が沸き起こる。

もし角田先輩が竜也に好意を向ければ、竜也はどういう反応をするだろう。

少なくとも、悪い気はしないはずだ。それどころか、竜也の方から好意を向ける可能性だってある。

その想像に、自然とイライラが募った。

今まで感じた事のない気持ち胸を満たしていく。

「竜也くんは、綺麗な指をしているな」

不意に、角田先輩がそんな事を言った。

「そうですか？」

「細く長い指をしているだろう？ 着手が綺麗に見える」

確かに竜也の将棋を指す姿は綺麗だった。将棋にあまり興味のない私でも、見ていて飽きないぐらいには。

「少し見せてくれないか？」

「え？」

竜也が小さく驚くような声をあげる。

次の瞬間、角田先輩が自然な仕草で竜也の手を取った。

驚きに、思わず雑誌を落としそうになる。

「私はね、男の人の指がちよつとだけ好きなんだ」

角田先輩は恥ずかしそうに小さく笑いながら、そう言った。

「細い指とか血管が浮き出ているところを見ると、つい触りたくなつてしまう」

親しい男性がいないから中々出来ないのだけど、と付け加えて角田先輩はなおも竜也の手を遠慮がちに触っていた。

対する竜也は、視線を逸らして苦笑するように沈黙を守っている。

それが私には満更でもなさそうに見えて、お腹の奥からとてつもない不快感が沸き起こった。

考えるよりも先に椅子から立ち上がり、口を開く。

「竜也って昔から指長いもんね」

身体が自然と、竜也の元へ進んだ。

角田先輩の手が、竜也から離れる。

「小学生の時は私の方が身長が高かったのに、手の大きさを比べたら竜也の方が少し大きかったりしたよね。覚えてる？」

咄嗟に出た思い出話をしながら、竜也の手に自分の手を合わせる。

竜也に触れるのは久しぶりだった。

互いに大きくなってからは、見えない壁のようなものが出来てしまった。

昔のように気にせず何でも出来る仲ではなくなって、何でもない友人のように振る舞う必要が出てしまった。

私があまりにも無遠慮に近づくと、竜也の方から距離を取るようになって。

今のように竜也に触れるのは本当に久しぶりで、もしかしたら私の顔は少し赤くなっているかもしれない。

なのに、竜也は平然とした顔をしていた。

角田先輩に手を触られていた時のように視線を逸らす事もなく、ただ懐かしそうに笑っただけだった。

心臓を何かで突かれたように、息が止まる。
触れていた手が離れ、竜也の温もりが消えた。
身体が急速に冷えていく。

「前から気になっていたんだが」

横から角田先輩の声。

「二人は付き合っているのか？」

全身の筋肉が強ばるのが分かった。

身体が動かない。

肺腑の中が空っぽになったように息苦しかった。

何も答えない私の代わりに、竜也が口を開く。

「いえ、ただの幼馴染です」

視界がぐるぐると回る。

何か言わないといけないのに、頭の中がぐちゃぐちゃになって何も考えられない。

「ああ、そうだったのか。つまらない事を聞いてすまない」

角田先輩の相槌。

私にはそれが、強い安堵の色を含んでいるように聞こえた。

3話

つまらない人間だと自覚していた。

幼い頃に両親を亡くし祖父の家で育てられたせいか、周囲と話が合わない事が多かった。

周囲がアニメを見ている時に私は時代劇を見ていたし、周囲がゲームをしている時に私は将棋を指していた。

食生活も大きなズレがあつて、他の子たちが色々な洋食を食べている時に私は毎日魚ばかり食べていた気がする。

一つ一つは小さな事なのに、それらはやがて積もり積もつて私を世間知らずな子供へと成長させた。

幼少期の私は特別親しい友人を持たず、どこか浮いた存在だった。腫れ物扱いだった、と言い換えても良い。

両親がいけないというのもそれに拍車をかけた。

リーダーシップの強い子に声をかけられて女子グループの中に何となく混ざっているだけで、いなくても誰も気づかないし誰も困らない。

それが私、角田四季だった。

どうしようもなくつまらない人間。

自信を持つて友達だと呼べる存在は一人もいなくて、愛想笑いを振りまいているだけの存在。

やがて小学校を卒業し、中学へ進学してもそれは変わらなかった。

「角田さんって変わってるね」

何度もそう言われた。

例えばカラオケで演歌を歌った時とか、お菓子を持ち寄った時に煎餅を出した時とか。

ふとした時に、苦笑するように周りが顔を合わせてそう言うのだった。

私がおかする度に、場が冷えていく。

困ったような空気が広がって、嫌な空気にならないように誰かが無理やり話題を変える。

誰も悪気はない。私を氣遣って自然とそうなっていく。いつの間にか口数が減った。

人と接するのが億劫になって、高校生になってからは一匹狼を氣取るようになった。

他人から苦笑される事に嫌気が差していたし、はじめから一人の方がずっと楽だった。

特に何もないうまま年齢だけを重ねていく。

そして高校三年にあがった時、ふと掲示板に将棋部のポスターが貼つてあるのを見つけた。

将棋。

私の唯一と言ってもいい趣味。

しかし、一年の時に将棋部はなかったはずだった。

ポスターの隅に書いていた顧問に話を聞きに行くと、初老の先生は嬉しそうに語った。

「去年、一人の男子生徒が作ったんだよ。形だけで他は幽霊部員みたいなんだけどねえ」

せっかくだから見学したらどうだい、という顧問の言葉に私はすぐに飛びついた。

将棋部。それも少数の部員。

理想的な環境のように思えた。

そのはずだった。

「今ってどっちが勝ってるの？」

竜也くんの後ろからしなだれかかると、飛山さんが言う。

飛山霧香。

将棋にそれほど興味があるわけではなさそうだった。

なのに、竜也くんの幼馴染という理由で将棋部に入り浸っている。

「……四季先輩の方が押している、かな」

竜也くんが盤面を睨みながら答える。

彼は真剣な顔で思考に耽っていて、しなだれかかってくる飛山さんを邪険に扱う様子はない。

それだけで彼らが随分と親しい仲がである事が見て取れた。

幼馴染。

私には縁がない概念だった。

親友と呼べる存在は誰もいなくて、友達だと胸を張って言えるクラスメイトすら一人もいない。

幼少期から互いを知り尽くした存在。赤の他人なのに家族のような存在。

それが私の目にはどうしようもなく眩しく映った。

「あ、これ美味しいよ」

飛山さんが棒状のお菓子を竜也くんに向かって差し出す。

対して竜也くんは口を開けて、それを対して気にした風もなく食べた。

腹の奥から強い不快感が沸き起こってくる。

形容し難い感情だった。

きっと私が同じようにお菓子を差し出しても、竜也くんは適当に理由をつけてやんわりと断るだろう。

幼馴染という特別な存在だから、飛山さんだけがそれを許されている。

「……さあ、竜也くんの番だよ」

自然と低い声が出た。

竜也くんとの対局は、ここ最近の私にとって至上の楽しみだった。部室こそが私の唯一の居場所になりつつある、と言っても良いだろう。

それを飛山さんに邪魔されているように感じ、苛立ちが募っていくのが自分でも分かった。

「そうだ、昨日の二歩事件は見たかい？」

「矢田八段と中上八段ですか？」

「ああ。初優勝のチャンスだったのに、見ていて思わず声をあげてしまったよ」

「解説の人も声あげちゃってましたね」

談笑しながら、ちらりと飛山さんの様子をうかがう。

彼女は竜也くんにしなだれかかりながら、どこか退屈そうに余所見

していた。

それを見て、暗い喜びが心を満たした。

将棋という分野であれば、長い年月を共にした飛山さんよりも私の方が竜也くんの理解者になれる。

「飛山さんは」

自然と口が開いた。

「あまり将棋に興味がないのかい？」

疑問を投げかけると、飛山さんの目が動揺するように揺れた。

「……どうしてですか？」

平坦な声が返ってくる。

感情が乗らないようにしているのが丸わかりだった。

「ずっと盤面を見ていないからね。将棋が好きだとはあまり思えない」

飛山霧香はただの初心者ではなく、そもそも将棋自体に興味を持っていない。

それは誰がどう見ても明らかだった。

「竜也くんの幼馴染だから、数合わせで付き合っているのかい？」

「数合わせなんて……確かにガチってるわけじゃないですけど、ゆるーくやるのが好きなだけです」

それに、と飛山さんは言葉を続けた。

「自分でやるのは好きですけど、他人がやってるのを観戦するのはちよつと退屈なだけです」

確かに、そういう人も多いだろう。

逆に自分では指さないが観戦を好む人だっている。

しかし、私にはどうしても飛山さんが将棋を好んでいるようには思えなかった。

「そうなのか。もし無理に部活に出ているなら、もう大丈夫だと言いたかっただけだ。すまない」

作り笑いを浮かべながら、盤面に視線を戻す。

竜也くんが次の手を指し終えたところだった。

「霧香」

今まで黙っていた竜也くんが、ゆつくりと口を開いた。

「もし負担になってるなら、毎日出てこなくても大丈夫だよ」
穏やかな、気遣うような声だった。

「今は角田先輩がいるから。もう大丈夫だから」

わずかに口の端が吊り上がるのがわかった。

視界の隅では、飛山さんが呆然とした表情を浮かべている。

竜也くんはまだ盤面を見ていて、それに気づかない。

「今までありがとう、霧香」

途方もない何か胸を満たしていく。

私はつまらない人間から、嫌な女に変わりつつあった。

4話

「頭の体操しようかな、と思って」

立ち上げたばかりの将棋部に霧香が初めてやってきた時、なんだか気恥ずかしくて顔には出さなかつたけれど内心では嬉しく思っていた。

何となく疎遠になってしまった幼馴染にずっと寂しさを覚えていたし、雲行きの分からない将棋部によく知った霧香が来てくれたのは心強かった。

「ね、やり方教えてよ。竜也って強いんでしょ」

霧香は昔とあまり変わっていないかつた。

髪が伸びて大人っぽくなつたけれど、人懐っこい性格と勝ち気なところは何も変わっていない。

毎日のように霧香に将棋を教えるうち、俺たちは徐々に昔のような関係に戻りつつあつた。

くだらない事で笑い合つて、ちよつとした沈黙も気にならず、思つたことをそのまま言える存在。

霧香と二人だけの部活は楽しかつたけれど、そのうちに何となくわかつてしまった。

霧香は将棋がそれほど好きではない。

おそらく、一人で部を立ち上げた俺に気を遣つて将棋をやっているだけだ。

だから部活中の雑談がどんどん増えて、将棋をやる時間はどんどん減つていった。

将棋は新作のお菓子を一緒に食べながら片手間にやる程度。

それでもよかつた。霧香と過ごしていると昔に戻れたみたいで楽しかつた。

それに、少しだけ霧香のことを異性として意識するようになっていた。

俺たちはもう子供ではなくて、異性に対して距離を取るだけでなく興味を持つ年齢になつてしまつていて。

だから、あまり将棋に熱がない活動でもずっと続けてこれた。けれど心のどこかで将棋をやりたいという欲求は燻り続けていた。そんな時、角田先輩が入部してくれた。棋力も同じくらいで、将棋に対する熱意も同程度だった。独特の男勝りな話し方のせいかな、年上なのに親しみやすさもあつた。

これでなんとか将棋部として本格的にスタートできる。だから、霧香が無理して毎日部室に顔を出す必要はもうどこにもない。

「もし負担になってるなら、毎日出てこなくても大丈夫だよ」
幼馴染という繋がりだけで、一年もの間ずっと甘えてしまった。

「今は角田先輩がいるから。もう大丈夫だから」

霧香をここに縛り続けるのはやめよう。

いい加減、独り立ちするべき時だった。

「今までありがとう、霧香」

感謝の気持ちを込めて、今までの礼を口にする。
何となく気恥ずかしくて、顔をあげることが出来なかった。

「え、あ……私は……」

霧香の戸惑うような声。

ゆつくりと盤面から顔をあげると、半笑いのような、何か言いたそうな霧香と目があつた。

「私は……別に……そういう意味で部室に来てたわけじゃなくて……」

そこで一度、言葉が途切れた。

それから霧香は満面の笑みで笑った。

「まあ少し心配してたところはあつたけど、私も部活楽しんでたよ？

中学時代はちよつと疎遠になっちゃったしさ」

その言葉で、疎遠になってしまった事に寂しさを覚えていたのは俺だけではなかったのだと知る。

どちらから距離をとったわけでもない。

性別が違うという理由だけで、自然とそうなってしまった。

「もう将棋部は大丈夫そうだね。初心者の私がいても邪魔なだけだし、時々遊びにくるだけにしようかな」

俺にしなだれかかるといって、霧香が、よいしょ、と立ち上がる。

「それに今はもう、昔みたいに仲良しに戻れたもんね。ま、部活に拘る必要ないかあ」

「ああ……そうだな」

異性を必要以上に恥ずかしがる年齢はもう終わった。

俺たちは昔のような関係に戻れたのだと思う。

「だからさ」

霧香の視線が俺から逃げるように天井へ向く。

一瞬の沈黙。

それから霧香は小さく息を吸って、まっすぐと俺を見た。

「今度デートしようよ」

時間が止まった気がした。

頭の中が真っ白になって、一拍遅れてから俺は誤魔化すような笑みを浮かべた。

「デート？」

聞こえていたのに、反射的に聞き返す。

頭の中に言葉がちゃんと染み込むまで時間稼ぎをするように、口が勝手に動いた。

「俺と、霧香が？」

「そう。竜也と私が」

そして、霧香はなぜか角田先輩の方を見るようにして笑った。

「私と竜也って別に将棋だけの繋がりがりじゃないしさ、普通に遊びにいいよ」

「……ああ……遊びに行くって意味か」

ようやく理解が追いつき、全身から力が抜ける。

心臓が驚くほど不規則に脈打っていた。

「ね、良いでしょ？」

霧香が薄い笑みを浮かべる。

ちょうど窓から夕日が差し込み、いつもよりも大人っぽく見えた。

「今はあまり金ないから遠くはいけないぞ」

「大丈夫だよ。竜也とだっただらどこでもいいから」

霧香はそこで一瞬悩むように小首を傾げて、それからすぐに何か思いついたように俺に視線を戻した。

「お金ないんだったら家でも良いよ。ずっとお父さんとお母さんにも会ってないでしょ?」

「そうだけど……家はまずくないか?」

「いいじゃん。昔はよくお互いの家行ってたんだし。なんか懐かしくない?」

「あ、ああ……」

勢いに押し切られるように頷く。

「じゃあ四日後の日曜日は? 日曜ならお父さんとお母さん両方いるから久しぶりに会ってあげてよ」

「そうだな……わかった。日曜なら空いてるし大丈夫だと思う」

「じゃ、決まりね」

霧香は弾けるような笑みを見せて、机の上に置いていた鞆を手にとった。

「じゃ、私は帰るから。日曜日までに家をピカピカにしとかないとお疲れー」

「ああ……お疲れ」

霧香は小走りで戸口に向かい、それから最後に振り返った。

「角田先輩ー。将棋がんばってくださいねー」

にへら、と霧香が笑う。

角田先輩は放心したように、ああ、と短く答えて後は何も言わなかった。

戸口が締まり、部室に静寂が戻る。

突然の霧香の誘いに頭が追いつかず、俺は座ったまま暫く呆けていた。

不意に、じやら、と音が響く。

振り返ると角田先輩が駒を片付けているところだった。

逆光のせいか、ひどく無表情に見えた。

「今日はもう遅い。私達も帰ろう」

「あ、はい。そ、そうですね」

俺も手元の駒を片付け、駒袋に入れていく。

角田先輩はそのまま片付けを終えると、空いた机に置いていた鞆を無言で手に取った。

「また明日」

「はい……あの、お疲れ様です」

俺の言葉を待たずに先輩は背中を向け、そのまま戸口から出ていった。

後に残された俺の影が、誰もいない部室の中を伸びていく。

いつの間にか、外から届く運動部の掛け声は聞こえなくなっていた。

カア、とまもなく闇夜が訪れることを知らせるようにカラスが一度鳴いて、それからすぐに何も聞こえなくなる。

俺は慌てて帰りの準備を済ますと、部室から飛び出して鍵をかけた。

重い施錠の音が、妙に耳に残った。

5話

翌日の先輩は元気がなかった。

対局中もどこか上の空で、いつもより口数が少ない。

後手の俺の方が終始優勢で、なにか考え事をしているようだった。

「先輩」

声をかけると、角田先輩はぼんやりと顔をあげた。

「なにか悩み事ですか？」

先輩は少し考えるように首を傾げて、薄い笑みを浮かべた。

「いいや。なんでもないよ」

「……でも、体調が悪そうです」

言いながら、予め考えていた手を指す。

先輩は盤面を見下ろして、小さく息をついた。

「勝っていると思っていたら、実はすでに負けていた。そういう事はないかな」

「……何度もあります。読み筋通りにならない事のほうが多いと思います」

「ただの悪手じゃない。見落としによる頓死（とんし）だ。こういう場合はどうしたら良いんだろうね」

「……経験を積んでいくしかないんじゃないでしょうか」

「そうだな。その経験が全くなかったんだ。はじめから勝ち目なんてなかったのかもしれない」

先輩が自嘲するように笑う。

何の話をしているのか見当がつかなかった。

少なくとも将棋の話ではないのだろう。

言葉を選びながら、慎重に口を開く。

「少し休憩をいれませんか？」

「ああ、そうしようか」

椅子の横に置いていた鞆に手を伸ばし、中から小さなチョコを取り出す。

「先輩、チョコいりませんか？」

糖分補給に一つ差し出すと、先輩は動きを止めた。

その視線は俺ではなく、開いたままの鞆に向けられていた。

「先輩？」

「それは……」

先輩が上ずった声をあげる。

「……そのクリアファイルを見せてくれないか？」

「……これですか？」

開いた鞆から見えているクリアファイル。

それを取り出すと、先輩は信じられないといった顔で俺を見た。

「……好きなのか、それ？」

「はい。祖父の家でよく観てました」

昔の時代劇のクリアファイルだった。

將軍である徳川吉宗が市民に紛れて悪を斬る、という分かりやすい勧善懲悪もの。

一種の変身ヒーローのようで、子供だった俺でも祖父と一緒に楽しむ事ができた。

「祖父……そういえば祖父と将棋を指していたと言っていたな」

「はい。夏休みは昔から祖父の家に預けられる事になっていて、いつのまにか趣味が年寄りくさくなってしまいました」

昔を思い出し、思わず苦笑する。

周囲が戦隊ヒーローごっこをやっている時に、俺は將軍ごっこをやっていた。

祖父が買い与えるものも変身ベルトではなく、チャンバラ用の剣だった。

「ほ、他の時代劇も見ていたりするのかわ？」

先輩が前のめりになって訊いてくる。

「有名なシリーズものは大体観てます。先輩も好きなんですか？」

「ああ……大ファンなんだ。だが今まで時代劇ファンと出会った事がなくてね……」

「一番どれが好きなんですか？」

「わ、私は王道の勧善懲悪も好きなんだが、一番好きな作品をあげると

するならダークヒーローが一番好きだな……単純な正義の味方でないところに憧れて何回も見直したよ」

主人公が殺し屋のシリーズだろう。

子供心によく刺さった覚えがある。

「あ、それも好きです。あとは……銭投げを真似たりもよくしました。お金を投げるところを祖父に見つかってこっぴどく怒られたのを覚えています」

「ああ！ 私もやったぞ。金を粗末にするなって叱られたんだ」

先輩が昔を懐かしむように笑う。

「初期の作品を観たことあるか？ 投げた銭を後でちゃんと拾いに行くんだけ。それを観せられて、ほら粗末にしちゃいけないんだ、って」

「子供が真似しないように配慮してたのかもしれないね」

一緒に笑い合う。

いつの間にか、先輩はいつも通りの元気な姿に戻っていた。

「でも意外です。先輩が時代劇好きだったなんて」

「……私には両親がいないからな。祖父に育てられたから年寄り臭い生活になってしまった」

「結構からかわれたりしますよね。年寄りくさいって」

「ああ、そうなんだ。特に女子では時代劇を観ている子なんて全然いなくてね。誰とも趣味の話が出来なかったよ」

だから、と先輩は嬉しそうに言った。

「竜也くんとこういう話が出来て良かった。クリアファイルを見た時は驚いたよ」

「これ、映画を見に行った時のやつなんです。祖父が買ってくれて」

「仲が良いんだな。将棋も祖父から習ったんだろう？」

「祖父の友人たちに無理やり仕込まれました。子供相手に本気で指してくるんですよ」

「年寄りはどこも似たようなものだな。私の祖父も手を抜いてくれなかったよ」

先輩は笑いながら、机に置いていたチョコを手にとった。

「年寄りが用意するお菓子って独特じゃあないか？ こういう子供が

好きなものは出さないんだ」

「お煎餅とかですか？」

「ああ。コンビニで見かけない商品ばかり出してくるんだ。不思議なものだよ」

「お中元の余り物なのかなって疑ってました」

「ありうるな。近くの商店では流通してなさそうなのをよく手に入れてくるものだと逆に感心する」

「先輩は甘い方が好きなんですか？」

問いかけると、先輩は不意に黙りこんで俺をじつと見た。

「竜也くん、その先輩って呼び方はやめないか」

「呼び方、ですか？」

「ついでに敬語もやめよう。どうせ二人きりなんだ。上下関係なんて作りたくない」

先輩はそう言って、考えるように顎に手をのぼした。

そういう演技じみた仕草が、美形の先輩には良く似合う。

「そうだな。竜也くんと呼んでいるのだから、私のことも名前で呼んでほしい」

「あの、でも」

「私のことを先輩と呼ぶなら、私は竜也くんのことを部長と呼ぶぞ」

思わず笑う。

「なんですか、その脅しは」

「そもそも将棋部においての先輩は竜也くんなんだ。竜也くんが私に気を遣うべきじゃないだろうっ」

「……では、四季さんと呼びます」

先輩に引く気はなさそうだったので、あっさりと降参する。

すると先輩は——四季さんは満足そうに頷いた。

「今日は色々と知ることが出来たし良かったよ。そろそろ時間だな」
「続き、どうしますか？ 明日に繰り越しますか？」

放置されたままの将棋盤に目を向ける。

四季さんはそれを一瞥すると、ゆっくり首を横に振った。

「私の負けだよ。あのままでは勝ち目はなかった」

「今日は随分とあっさりですね」

先輩が笑う。

どこか不敵な笑みだった。

「次勝てばいいだけだ。取られた駒は取り返せば良い」

「……明日も負けないです、四季さん」

「ああ。明日も楽しみにしてるよ」

先輩はそう言って、いつものように鞆を手にとった。

窓から差し込む夕日のせいかな、その横顔が少し赤く染まって見えた。

6話

「真剣勝負をしないか？」

金曜日の放課後。

四季さんは対面に腰を下ろすと、開口一番にそう言った。

「勝負、ですか？」

「そうだ。負けた方は一つだけ何でも言うことを聞く、というのはどうだ？」

少しだけ逡巡する。

四季さんなら無茶な事は言わないだろう。

真剣勝負のスパイスとしては面白いように思えた。

「なんでも、ですか？」

「可能な限りなら何でも、だ」

「一局だけですか？」

「一局だけだ。あとから二本勝負とかは言わないよ」

頷いて、駒袋をひっくり返す。

じゃらじゃらと駒が盤面に広がった。

「わかりました。受けて立ちます」

駒を並べようとする、四季さんが五枚の『歩』を手にとった。

「振るよ」

「あ、はい」

四季さんが五枚の『歩』を転がす。

振り駒。

普段はジャンケンで適当に先後後手を決めるのに、四季さんは敢えてそれを選択した。

いつもの遊びではない、という事なのだろう。

「四季さんの先手ですね」

「ああ」

転がされた五枚中、四枚が表だった。

表が多い場合、振り手が先手を取る事になる。

四季さんは残った駒を並べると、ゆっくりと息を吐き出した。

「じゃあ始めようか」

「はい。よろしく願います」

昨日の様子が嘘のようだった。

指し始めた四季さんは盤面を油断なく睨み、何とも言えない気迫があった。

しん、とした部室に着手の音だけが響く。

久しく感じたことのない緊張感があった。

こういう緊張感は、霧香と指している時には微塵も感じたことがなかった。

対等な相手だからこそ味わえる特別な空気。

肺腑の中の空気をゆっくりと吐き出し、意識を集中させていく。

このために将棋部を創設したのだと、初心を思い出した。

誰かと競い合って、互いの知力を振り絞る。

そういう事が、多分しなかったのだと思う。

ずっと忘れていた。

なんとなく将棋を指す毎日に埋没していた。

だから、この一瞬を提供してくれた四季さんには感謝しないといけない。

「……むう……」

四季さんの口から、小さな呻き声が漏れた。

将棋は基本的に先手が有利と言われている。

しかし、まだ押し切られていない。四季さんは攻めあぐねているようだった。

ゆっくりと視線をあげ、四季さんの表情を見る。

思考の海に沈む四季さんは、俺の視線に気づかない。

いつもより真剣な表情が気になった。

四季さんは勝てば何を命令する気なのだろう。

購買で昼食をおごって欲しいとか、宴会芸のような何かをさせるとか。

そういうありきたりな事ではないように思えた。

まだ一ヶ月ほどこか一緒に過ごしていないが、人に何かを命令した

がる人ではないはず。

勝った時は恐らく、お願いのような形で望みを言うのだろう。そこまで考えた時、ふいに四季さんが顔をあげた。

視線が合う。

吸い込まれるような大きくて黒い瞳。

時間が止まったような気がした。

目を逸らす暇もなく、互いの視線が正面から絡み合ったまま停止する。

四季さんは何も言わず、俺のを見ていた。

何か言おうとする言葉が出てこない。

沈黙が場を支配していた。

反射的に盤面に視線を落とす。

同時に四季さんの右手が動き、着手する音が響いた。

「待たせて悪かったね。竜也くんの番だ」

「え？ あ……はい」

頭の中が真っ白になっていた。

考えていた読み筋がどこかに飛んで、思考がまとまらない。

小さく息をつき、盤面から視線をあげる。

四季さんはまだ俺のことを見ていた。

視線が一瞬重なって、そのまま絡み合う前に視線を盤面に戻す。

春の涼しい時期なのに、手に汗が滲んでいた。

心臓の鼓動が早くなっているのが自分でもわかった。

「今日はよく目が合うね」

四季さんが小さく笑いながら言う。

「そう、ですね」

考えがまとまりそうになく、直感に従って着手する。

四季さんはそれを確認すると、一拍置いてからすぐに次の手を指した。

焦りが生まれるのを自覚しながらも、それを抑える術が俺にはなかった。

部室に駒を指す音だけが響く。

対局中、ずっと四季さんが俺を見ているのが分かった。恐らく、意識してのものではないのだろう。

時折こつちから視線を向けると、四季さんは不思議そうに首を傾げた。

それが余計に思考を狂わせた。

いつもより真剣な四季さんと、いつもより思考が乱れた俺。

結果は目に見えていた。

「……ありません」

投了を告げる。

中盤からは終始劣勢だった。

ずっと主導権を握っていた四季さんは満足そうに一度頷くと、背伸びしながら大きく息を吐いた。

「今日は調子が悪いんじゃないのか？」

「……完敗です」

弁解の言葉も思いつかない。

「それに敬語はナシだと言っただろう、部長」

「……もしかして、それが命令ですか？」

盤面の駒を片付けながら問いかける。

四季さんなら、そういう命令もありそうだった。

しかし、四季さんは首を横に振った。

「いや……命令というかお願いになるんだが……」

珍しく歯切れが悪い。

口に出すことを躊躇するように、四季さんの目が左右に泳ぐ。

「……明後日の日曜日に、飛山さんと遊ぶんだろう？」

「はい。その予定です」

「……じゃあ土曜日は予定がないのか？」

「何もありません」

じゃあ、と四季さんの声が大きくなる。

「ど、土曜日にどこか遊びにいかないか？」

「遊びに、ですか？」

意外な申し出だった。

きつと女子一人では行きづらい所なのだろう。

「どこか行きたいところがあるんですか？」

「い、いや、そういうわけではないんだが……竜也くんはどこか行きたい所はないのか？」

「えつと……ごめんなさい。すぐには思いつかないです」

「そ、そうか……いや、場所はいつでもいいんだ。土曜日は私と遊びに出かけて欲しい」

想像していた中では、ずっとソフトな命令だった。

「それくらいなら大丈夫です。命令はそれだけで良いんですか？」

「ああ……命令と言っても嫌なら別にいいんだ。無理して付き合わないくても……」

「大丈夫ですよ。嫌なんかじゃありません」

それで、と言葉を続ける。

「場所はどうしましょうか。明日出かけるなら今日中に決めておきたいです」

「そ、そうだな……ちよつと待つてくれ」

先輩がスマホを取り出し、調べ物を始める。

「……雨の予報になっているな……」

「屋内だとカラオケとかボウリングでしようか？」

問いかけると、先輩は少しだけ黙り込んだ。

それから、意を決したように俺の方へ視線を向けた。

「いや……どうせなら私の家にしよう」

対局中に感じた、どこか粘り気のある視線だった。

7話

天気予報は外れなかった。

土曜日の午前九時。

学校の校門前で、傘を差しながら四季さんを待つ。

遠くに出かけるわけじゃないのに、随分と待ち合わせ時間が早い気がした。

ちょうど腕時計に目を向けた時、水たまりの弾ける音がした。

「お、遅れてすまない！」

「大丈夫。まだ時間になってないです」

四季さんは俺の目の前で足を止めて、息を整えるように大きく肩を揺らしていた。

膝上のフレアスカートが、呼吸と共にひらひらと舞う。

普段の男勝りな喋り方から何となく中性的な私服を想像していたから、少し意外に思えた。

「ギリギリまで……はあっ……服を選んでいたら……出発が遅れてしまつて……」

「自分も来てそんなに経ってないです。急がなくても大丈夫ですよ」

四季さんの息が整うのを待つてから、それで、と話を切り出す。

「このまま四季さんの家にまつすぐ向かう予定ですか？」

「ああ……徒歩圏だからな。すぐだ」

行こうか、と四季さんが歩き出す。

「地元だったんですね。同じ中学の人も多いんですか？」

「三人いるが、あまり親しくはないな。そもそも私は教室だとあまり話さないんだ」

「そうなんですか？」

意外だった。

将棋部では霧香よりも俺と話す事が多いくらいだったから、男女別け隔てなく誰とでも接するイメージがあった。

それに部活中はそれほど寡黙なわけでもない。

「大勢が苦手なんだ。周りに人がいっぱいいると上手く話せなくて

ね」

我ながら情けないものだ、と四季さんは独り言のように呟いた。

「だから私にとって、今の部活はとても居心地が良いよ。相手が竜也くんだけだと落ち着くんだ」

「……なら良かったです」

そう言つて貰えるなら、将棋部を作つた意義を見いだせる。

全部無駄じゃなかったのだと、胸を張る事が出来る。

「着いた。……だ」

不意に先輩が足を止めた。

小さな庭がある一軒家だった。

「今は誰もいない。楽にしてくれ」

そう言つて四季さんが門扉を開ける。

「え？ 誰もいないんですか？」

「ああ。昨日から地域の旅行に行つてるんだ。どうも幹事をやってい
るらしくて張り切つていたよ」

四季さんは特に気にした風もなく言う。

俺は何か言おうと口を開いて、結局何も言わなかった。

異性の家であることを過剰に気にするのも良くないだろう。ただ
の部員なのだから、変に意識する方がおかしいのかもしれない。

「ほら、遠慮せず上がると良い」

「……あ、はい。おじゃまします」

玄関扉を四季さんの後に続いてくぐると、線香の香りがした。

次に、古い家特有の埃のような匂い。

「薄暗いだろう？ どうして昔の家は玄関が暗いんだろうね」

先輩が靴を脱いで、さっさと廊下の先へ行つてしまう。

慌てて後を追うと、玄関横の和室に仏壇が飾つてあるのが見えた。

四季さんはそのまま部屋の前を通り過ぎると、奥の洋室へ俺を案内
した。

「一応、……ここが私の部屋だ」

襖で仕切られていて、鍵はなかった。

思春期の女子としては質素な部屋模様。

「実は家に友人を招いた事がないんだ。ここに入ったのは竜也くんが初めてだよ」

四季さんはそう言って、落ち着かない様子で俺を見た。

「さあ、何をしようか。実はあまり何も考えていなかったんだが……映画でも見ないか？」

「一本見ればちよつとお昼頃になりそうだし、丁度いいですね」

「あ、ああ。ちよつと待ってくれ」

先輩がパソコンを立ち上げ、映画配信サイトへアクセスする。

「こ、これなんてどうだ？」

「あ、ちよつと気になつてるタイトルでした」

少し前のホラー映画だった。

病院で夜な夜な変な音が聞こえるという和製映画。

「……せ、せつかくだし、部屋を暗くしようか」

四季さんは俺の返事を聞く前に窓際へ向かい、カーテンに手を延ばした。

途端、部屋が一気に薄暗くなる。

「結構暗くなるものだね。流すよ」

先輩が再生ボタンをクリックすると、見慣れた制作会社のロゴが映し出された。

四季さんがベッドに腰掛けて、すぐ隣を叩く。

「……座つたらどうだ？」

俺は一瞬躊躇して、素直に腰を下ろす事にした。

柔らかいベッドが沈みこみ、隣にいた四季さんと一瞬だけ肩が触れ合う。

「ホラーは殆ど見ないから楽しみだよ。竜也くんは普段から見るとかいい？」

「あまり、ですね。見るとしても有名なものばかりです」

「もしかして苦手なのかい？」

「どうなんでしょう。得意とは胸を張って言えないところです」

モニターの向こうでは看護師が夜の病院を巡回していた。

不気味なだけで、まだ何も起こってはいない。

四季さんは緊張した様子もなく、ごく自然な様子で言葉を続けた。
「もし苦手なら」

そこで言葉が止まった。

映画の中で主人公が廊下を歩く音だけが室内に響く。
時間の進みが、妙に遅く感じられた。

「手でも繋いでみようか」

冗談めかすような言い方だった。

けれど、画面ではなく俺に向けられた目はどこか真剣なものだった。

適切な言葉が見つからず、俺はただ見つめ返すだけで何も言えなかった。

薄暗い中で、畳み掛けるように四季さんが言葉を続ける。

「こうすれば怖くはないだろう?」

手が重なった。

温かい四季さんの手が、上から覆いかぶさって優しく俺の手を握る。

「いや、私が怖いだけなのかもしれないな。少なくとも、暇つぶしに一人でホラー映画を見ようとは考えない方だからね」

四季さんが早口で言葉を続ける。

「ここまでされて四季さんの気持ちを読められないほど鈍くはない。動揺を抑え込んで作り笑いを浮かべる。

「意外ですね」

いつの間にか、映画のシーンが切り替わっていた。

内容が頭に入っていない。

四季さんもモニターではなく、ずっと俺の方を見ていた。

「……嫌がらないんだな」

何が、とは言わなかった。

上から重なった手に、少しだけ力が込められる。

「嫌なんかじゃ、ないです」

考えるより先に、絞り出すように言う。

少なくとも、好意のようなものはあった。

まだハッキリした形として認識してはいなかったけれど、たぶん心のどこかでは意識していた。

真剣勝負として指した将棋では高揚感のようなものがあって、時代劇の話をしている時はたわいのない話なのにこのままずっと話していたと思っていた。

それらはクラスの友人と話している時には得られないもので、たぶん特別な感情なのだと思う。

「なあ、竜也くん」

穏やかな四季さんの声。

「私たち、付き合ってみないか？」

雨が窓を打つ中、はつきりとそう聞こえた。

ゆっくりと息を吸って、正面から四季さんを見る。

思ったよりも迷いは生じなかった。

「はい。よろしくお願いします」

考えるより先に、自然と言葉が飛び出した。

握った手が、更に強く握り返された。

「……敬語はナシと言っただろう？」

茶化すように四季さんが笑い、緊張が解けたように大きく息を吐き出した。

それからゆっくりと彼女の身体が傾いて、俺の肩にしなだれかかった。

「はあ……全く。映画の内容が頭に入ってこなかったよ。今は一体どういう状況なんだ？」

「……自分も全然見てなかったです」

画面の向こうでは、悲鳴と共に主人公たちが非常階段を駆け下りているところだった。

「もう一度始めから再生しようか」

「……そうした方が良さそうです」

顔を見合わせて、一緒に笑う。

四季さんは立ち上がってパソコンに向かうと、マウスを操作して画面を一時停止した。

それから、思い出したように振り返る。

「そういえば竜也くん、一つお願いがあるのだけど」

「お願い？」

聞き返すと、四季さんは頷いた。

それから何でもないことのように口を開いた。

「明日、予定があるだろうか？」

「……はい」

四季さんの瞳が、試すように俺をじつと見下ろす。

「飛山さんに断りの連絡を入れてくれないか。今、ここで」

8話

昔から朝が苦手だった。

いつも時間ギリギリまで寝てしまつて、母に怒られる事もよくあつた。

でも、その日は自然と朝早くに目が覚めた。
すべき事が山のようにある。

まずは家の片付けだ。

竜也が来る明日までには何とかしなければならぬ。

私の部屋はそれなりに片付いているが、両親はあまり几帳面な性格ではない。

しばらく洗った形跡がないリビングのカーテンを引き剥がし、洗濯機に放り込む。

ソファのカバーも気になったが、一度に洗える量ではない。

洗濯機の順番待ちをしている間に、床の拭き掃除をする。母はいつも掃除機をかけるだけだから、シミのようなものが所々に残つてゐる気がした。

「朝から何してるの?」

そうこうしている間に母が起きてきて、不思議そうな表情を浮かべた。

「見ての通り掃除だよ。言つたでしょ。竜也が明日来るつて」

「来るのは竜也くん一人だけでしょう? そんなに張り切つてどうしたのよ」

「……久しぶりに来たのに、汚いつて思われるの嫌じゃん」

竜也が最後に来たのは小学生の時だった。

昔より家が汚くなつたと思われるのは嫌だった。

「あ、そうだ。来客用のお菓子つて何かあつたつけ?」

「あなたが食べてるいつものオヤツならあるけど……」

「そうじゃなくて。もっとちゃんとしたお菓子ないの?」

「ないけど、男の子なんだしスナック菓子の方が良いんじゃないの?」

「じゃあジュースは?」

母の顔が、やや困惑した様子に変わっていく。

「……ちよつと気を遣いすぎじゃないの？ 初めてのお客さんじゃないんだし……」

「……久しぶりだから嫌なんだって」

小さい時とは違う。

私達はもう殆ど大人なのに、未だに子供のように扱おうとする母に嫌気が差した。

「いいや。私買ってくるから」

どうせ洗濯機が止まるまで時間がある。近くのスーパーで買えば良い。

「ねえ、霧香」

部屋に向かおうとする私に、母の声が投げかけられる。

「もしかして、竜也くんとお付き合ひする事になったの？」

一瞬、言葉に詰まった。

少しだけ迷いが生じる。

いつそのこと相談してしまおうか。

「……そんなんじゃないって」

結局、何も言わない事にした。

短く会話を切り上げて、部屋に向かい着替えを済ませる。

時計を見ると、ちよつとスーパーの開店時間だった。

家を出ると、朝の冷たい空気が肌を差した。

歩きながら、竜也は今頃どうしているのだろうか、と考える。

私と同じようにそわそわしているのだろうか。

いくら幼馴染とはいえ異性の家に来るのだから、多少は意識するだろう。

少なくとも、今回の事をきっかけに意識して貰える程度には頑張る必要がある。

そこまで持つていく事が出来れば、後はすんなりいくはずだった。

既に友人としては、親友と言っても良いレベルに達しているはずだ。

そう、異性として意識して貰うだけでいい。

焦る必要はない。

角田先輩よりも私の方がずっと竜也に近いのだから。

スーパーに着くと、私は真つ先に飲料売り場に向かった。

竜也は炭酸飲料を好む。二種類ほど買っておけば問題ないだろう。

それから、お菓子売り場で煎餅を手取る。

いつも夏休みは田舎に帰省していたせい、竜也は昔から煎餅が好きだった。

「年寄りみたいだ」とからかっていたのが懐かしい。

次に衛生用品のコーナーへ向かう。

部屋とりビングとトイレ用に芳香剤が三つ欲しかった。

あとは消臭スプレー。部屋用と玄関用。

いくつか目に入ったものが気になり、予定になかったものまで買うはめになってしまった。

特に匂い関係は妥協出来ない。

生活臭というのは慣れていると分からないし、竜也に幻滅されたくなかった。

レジを通すと、それなりの値段になった。

財布の中身が目減りしていくのを見て、小さく溜め息をつく。

竜也と付き合えても資金不足であまり遠くまで行けそうになかった。

夏休みになったらバイトを入れよう。

同じ場所でバイトするのを提案しても良いかもしれない。

それなら夏休み中も頻繁に会えるし、一緒に遊ぶ資金を確保出来る。

付き合った後の事を夢想しながら、家路を急ぐ。

その途中、小さな本屋があつてふと足を止めた。

将棋の本もあるのだろうか。

竜也が退屈しないように何か用意しておこう。

そう思って、本屋へ入る。

目当てのものはすぐに見つかった。

趣味のコーナーに並んだ将棋の本。

その中で、詰将棋の本を手取る。

初心者向けから上級者向けまで色々なものが収録されているようだった。

これなら竜也でも楽しめそうだ。

「これください」

レジに持っていくと、暇そうにしていた白髪の老人が意外そうな顔で手元の本を見た。

「これはプレゼントかな？」

いえ、と答えかけて口を噤む。

プレゼントにした方が喜ぶかもしれない。

「……はい。プレゼントです」

「うちは50円でラッピング出来るけど、どうしようか」

「じゃあお願いします」

「うん。ちよつと待っててね」

ニコニコと老人が笑いながら、包装紙を取り出す。

「お相手はお父さん？ お祖父ちゃんかな？」

「……あの、こ、恋人です」

「おやあ……じゃあ若い子だねえ。青色の包装紙で良いかな？」

「は、はい」

つい恋人と口走ってしまったが、老人は自分の事のようにニコニコと嬉しそうに本を包んでくれた。

「はい、出来たよ。喜んでくれると良いねえ」

「ありがとうございますっ！」

しっかりと紙袋を渡され、思わず頭を下げる。

そのまま店を出ると、よく晴れた空が私を出迎えてくれた。

眩しさに思わず目を細め、自然と笑みが零れた。

良い休日になりそうだった。

家に戻ると、父もリビングに出てきていた。

父は私を見ると母と似たような反応を示した。

「今日は随分と早いね」

「竜也が来るって言ったでしょ。色々と用意しないと」

買った物袋をテーブルに置く。

「それは？」

「お菓子とか芳香剤とか。洗濯物出してくるから、お父さんそれ冷蔵庫に入れといてー」

「ああ」

洗濯機からカーテンを取り出し、干すためにリビングに戻る。

買った物袋を覗いていた父が怪訝そうな声をあげた。

「おい、霧香。消臭剤買すぎじゃないか？　こんないらないだろう」

「いるんだって。ちゃんと全部の部屋に置いておかないと」

「だからってこれは……来るのは竜也くんだろう？」

「久しぶりだからちやんとしたいの。明日は髭剃ってよ。休みの日はいつも剃らないんだから」

父はそれで反論する気をなくしたのか、降参するように両手をあげてテレビに視線を移した。

「ちよつと部屋戻ってるね」

不意に私室の窓が気になった。

窓ガラス掃除はあまりしていない気がする。

あと、ベッドシートと枕カバーは今日中に洗っておきたい。

万が一の可能性だってあるのだから、寝具周りで手を抜くわけにはいかない。

「やる事、いっぱいあるなあ……」

いつもは気にならない所が、今日は妙に気になって仕方がなかった。

しかし、こういう部分で減点されたくない。

何から手を付けようかと部屋を見渡した時、ベッドに置いていたスマホから着信音が響いた。

慌てて手に取ると、発信者は竜也だった。

小さな胸騒ぎ。

「……もしもしっ？」

『あ、霧香？　いきなりごめん』

「ん。どうしたの?」

『いや……それが……』

歯切れが悪い。

嫌な予感が大きくなっていく。

「……明日の事?」

半ば予感のようなものがあつた。

恐る恐る問いかけると、電話口から肯定の言葉が返ってくる。

『……悪い。キャンセルさせて欲しい』

「あー、うん……日程変更しようか?」

沈黙が訪れる。

嫌な間だった。

なにか良くない事が起きる前触れのように思えた。

「竜也?」

『……日程を変更というか、キャンセルさせて欲しい』

何かを言い淀むような竜也の様子に、違和感が膨れ上がっていく。

「……理由、聞いてもいい?」

竜也はすぐには答えなかった。

竜也以外の声が、向こうから聞こえた気がした。

女の声だった。

「……竜也?」

焦燥感と不安が胸を満たしていく。

竜也の小さく息を吸うような音が耳に届く。

そして、呆気ないくらいにそれは告げられた。

『四季先輩と付き合う事になった。だから霧香の所には行けない』

9 話

「穴熊の姿焼きだね」

半年前の秋。

まだ部室に私と竜也の二人しかいなかった頃。

盤面を見下ろして硬直していた私に、竜也はそう言った。

「……すがた、やきう？」

「穴熊は完成すると固いけど、逆に囲い以外が取られるとこうやって何も出来なくなる」

特に、と竜也は歩を進ませた。

「と金と金を交換させられると、徐々に削られていくしかない。じわじわと焼かれていくだけだ」

竜也の言う通り、私が出来ることはもうなくなっていた。

完成した防御陣地は、もう何も意味を為していない。

「防御は大事だけど、防御するだけだと相手の王を取る事は出来ない。防御はあくまでこっちが王を取るまでの時間稼ぎでしかないって考えた方が間違いづらいかもしれない」

記憶の隅に残っていた竜也の言葉。

それが鮮明に蘇った。

たぶん、それは将棋に限った話ではない。

防御は時間稼ぎのための方法でしかなくて、そこで稼いだ時間を使って何らかの勝利条件を満たすべきなのだろう。

「それと、霧香は少しだけ駒の交換を嫌がる癖があるね」

竜也の指摘はいつもの確だった。

だから、素直に言うことができた。

「一方的に駒を取る、なんて事はどれだけ将棋が上手でもなかなか出来る事じゃない。だから、どの駒とどの駒をどうやって交換するか、という考え方も場合によっては必要になってくる」

だから、と竜也は穏やかに笑う。

「駒を交換するんだ、という心持ちで取らせてみると見え方が違ってくるんじゃないかな」

それも多分、将棋に限った話ではない。

何かを得ようとするには、何かと交換する必要がある。

それは時間だったりお金だったり、あるいは物だったりする。

何と何を交換するのか。どうやって交換するのか。

そして、いま私が持っている駒は何なのか。

たぶん、そういう事を考えていく必要があった。

すうっと、頭の中が冷えていく。

右手で握り締めたスマホは、いつの間にか通話が切れていた。

あの後、竜也に対してどういう風に答えたのか記憶が定かではない。

なにか適当に相槌を打って終わらせたような、そんな気がした。

ゆっくりと息を吐き出して、部屋を見渡す。

ベッドシートが目に入った。

私は暫くそれをじっと見つめた後、予定通りにベッドから剥がして洗濯機に放り込む事にした。

「お母さん、洗濯機もうちよつと使うね」

「それは良いけど……そこまですなくても……」

母が苦笑する。

私はそれを聞き流して、ふらふらと自室に戻った。

意味もなくスマホを触りながら、竜也にもう一度連絡するタイミングを考える。

おそらく、竜也は角田先輩と一緒にいるのだろう。

そして、角田先輩が竜也に断りの連絡を入れるように指示をした。

そう考えるべきだった。

ならばタイミングを図る必要がある。

角田先輩と離れた時を狙えば、竜也を誘導する自信があった。

私が持っている最大の駒は信用だ。

竜也は私の言うことを疑わないし、必要以上に遠ざけようとはしないだろう。

思考を切り替えるように、息をゆっくりと吐き出す。

そして、私は予定通りに家の片付けを進めた。

「将棋って先手の方が有利なの？」

いつの日か、私は竜也にそう尋ねた。

何かでそう聞いた覚えがあつて、特に何も考えず質問しただけだった。

けれど、竜也はじつと黙り込んで曖昧な笑みを浮かべるに留めた。

「どうだろうね。統計的には先手の方が勝率が少し高いだけだよ」

「高いだけって……つまり有利って事じゃないの？」

私の言葉に、竜也は言葉を選ぶようにゆっくりと口を開いた。

「……将棋の盤面はあまり大きくなくて、その中で駒が動くパターンの総数っていうのは限りがあつて有限だよね」

「ユーゲン？ ……ああ、うん。そうなるのかな？」

「ということは、もし全部のパターンを瞬時に把握できる人なら、どこかで必ず勝てるパターンが生まれるよね」

「……うん？ まあ……そうだね」

「その詰みが確定するのがどのタイミングなのかっていうのが、まだ分かっていない。ボードゲームによっては先手を取っただけで必勝パターンがあつたりするけど、将棋は初期状態では勝敗が決さないと
言われている。だから、先手が本当に有利なのかは何とも言えない。
実は後手の方が勝ちパターンが多いかもしれないし、それはもっと先の
時代で解析からじゃないと何とも言えないと思う」

それに、と竜也は言葉を付け加えた。

「棋士ごごとに勝率を見ると、後手の方が勝率が高い人だっている。
だから先手後手にそれほど拘らない方が良いと思うよ」

静かな校舎。

私と竜也の二人だけの部室。

ずっと続いて欲しかった世界。

それを思い出しながら、私は自分の勝率はどれくらいなんだろう、
と考える。

人の心の動きは将棋の盤面よりも遥かに複雑で、そのパターンが有

限なのかも分からない。

先後手は、重要ではない。

竜也はそう言ってくれた。

それは多分、何にでも言えることだった。先手だからとか後手だからという事に振り回されるのは馬鹿馬鹿しい。

だから、私は今もこんな事をしようとしている。

時計を睨みつけると、午後十時を回ったところだった。

角田先輩と一緒にいる確率は少ない。

スマホの連絡先から竜也を選択し、通話ボタンに指をかける。

——もし、まだ角田先輩と一緒にいたら？

頭をよぎった想像を無視し、通話をかける。

一コール。二コール。

『……もしもし』

四コール目で、竜也の声が届いた。

「あ、夜にごめんね。今一人？」

すぐに探りを入れる。

不安で心臓が早鐘のように鳴っていた。

『ああ……そうだよ』

「昼のことだけだよ、ちよつと時間いいかな？」

『……いきなり前日に悪かった』

「いや、それなんだけだよ……実はまだ親に言えてないんだよね」

『え？』

竜也の戸惑いの声。

それを無視して畳み掛ける。

「特にお母さんの方がさ。竜也と会うの数年ぶりでしょ？ 前から楽

しみにして張り切ってたさ、なんか言えなくって……」

『それは……』

「あのね、だからさ、短時間で良いから会ってあげてくれない？ 私と遊ぶんじやなくてさ、お母さんとちよつと話に来るだけなら別に良いでしょ？」

自分でも驚くほど舌が回った。

平気な顔で嘘を並べ立てて、竜也なら断れないであろう方向から攻める。

「角田先輩もそんな事で怒らないでしょ？ 私と会うんじゃないよ。近所のおばさんと会うだけなんだから。たまたま私の家でもあるだけで」

『……いや……そういうのは……』

「それにさー」

自然と声量が大きくなった。

「この前本屋に寄ったら詰め将棋の本見つけてさ、竜也が好きそうだなあと思って買って一冊買ったんだよね。部室に持っていく方がお邪魔虫みたいで嫌じゃん？ ついでに明日渡すから来てよ」

一瞬、沈黙が落ちた。

僅か数秒のことが、私には随分と長く感じられた。

短時間の通話なのに、スマホを握る手が汗ばんでいた。

『……わかった。短時間だけ寄らせて貰う事にする』

「そ、そっか。うん。お母さんも喜ぶよ。じゃあ明日の十一時ね」

『……ああ』

竜也の気持ちが変わらないうちに通話を切る。

自然と溜め息のようなものが出て、私はスマホを机の上に置いた。

その時、ラッピングされた本がふと目に入った。

私は無言でそれを手に取ると、包装に爪を立てた。

びりびりと音を立てて包装が破れていく。

足元に散らばっていく紙片はとても軽くて、もうただの可燃ゴミでしかない。

「駒を交換させるって、こういう事かな」

意外と簡単だな、と思った。

これなら多分、もっと大きな駒も交換できるだろう。

10話

「随分と大きくなったわねえ」

日曜の昼前。

飛山家のリビングで出迎えてくれたおばさんは、俺を見上げて懐かしそうに笑みを浮かべた。

「昔は霧香より小さかったのに、男の子の成長って早いよねえ」

「……おばさんも、お変わりないようすで何よりです」

「そこそこお変わりあるだろう。僕も妻も白髪が混じるようになったんだ」

ソファに座ってテレビを見ていたおじさんが、苦笑するように口を開く。

「子供の成長を見ると、自分たちもそれだけ歳を取ったのかと驚くよ」

「もう年寄りくさいなあ」

霧香は鬱陶しそうな表情をおじさんに向けた後、それからころっと表情を変えて俺に向き直った。

「どう？ 懐かしい？」

「ああ……変わってないなあ」

最後に霧香の家を訪れたのは確か、小学生の頃だった。

恐らくは五、六年前。

カーテンや家具はそのまま、当時と変わりなかった。

「二人がセミを取ってきた後、カゴの中は可哀そうだと言って家の中に放った事もあったなあ」

「……ご迷惑をおかけしました」

叔父さんが笑いながら手を振る。

「いや、いいんだ。懐かしいな、と思ってね」

「あ、座っててね。飲み物いれるから。炭酸でいい？」

「……ああ。ありがとう」

霧香がキツチンへ向かう。

それを見たおばさんがクスクスと笑い声をあげた。

「いつもそれくらい働いてくれたらいいのに」

「うるさいなあ」

「昨日もね、竜也くんが来るからって掃除をはりきって——」
「もう、うるさいって」

ペットボトルとコップを持った霧香がすぐに戻ってきた。

「竜也、もう部屋行こう。二人ともうるさいから」

「あ、ああ。わかった」

不機嫌な様子の霧香に先導されて霧香の部屋に向かう。

彼女の部屋も昔とあまり変わらなかった。

昔と同じベッド、机の位置。

違いは少しだけ小物が増えていくくらいだった。

俺が部屋を見渡している間に、扉を閉めた霧香が真ん中に置かれた丸テーブルにコップを置く。

「あ、適当に座って」

「……なんだか懐かしいな」

「低学年の時って、放課後は毎日どっちかの家で遊んでたよね」
懐かしむような霧香の声に頷く。

「必ず門限まで粘っていたな。そうするのが義務みたいだった」

「うん。でも四年生くらいかな。それくらいから互いに別のグループで行動するようになって、あまり遊ばなくなったよね」

明確なきっかけがあった訳ではない。

ただ霧香は女子のグループと遊ぶようになり、俺は男子のグループと遊ぶようになった。

「……昔一緒に遊んだゲーム、今も残ってるよ。久しぶりにやる？」

「……いや、長くなりそうだしやめておくよ」

長居する気はない。

おばさん達への顔見せは終わった。あとは適当に雑談を済ませたら帰る気だった。

霧香もそれを察したのか、そっか、と短く答えた。

「あ、電話でも言ったけど渡したいものあるんだ」

霧香が立ち上がり、机に置いていたものを手に取る。

帯がついたままの詰将棋の本だった。

「内容の良し悪しなんてよくわかんないから、つまらなかつたらごめんね」

「いや、嬉しいよ。ありがとう。あまりこういう本は持ってないんだ」
素直に感謝の言葉を口にする、霧香は嬉しそうに笑った。

「たまたま見つけて適当に買っただけだけどね。それなら良かった」

互いに次の言葉が見つからず沈黙が落ちた。

沈黙は慣れている。部室で長いこと過ごしていれば沈黙で過ごす事のほうが多い。

けれど、今は妙に居心地が悪かった。

次の話題を探るか帰るか迷っている間に、ねえ、と霧香が小さい声で切り出した。

「昔、教えてくれたよね。飛車と角を大事にしすぎだつて。そんなもの大事に抱えていても王を取られたら意味ないつて」

「ああ……」

霧香の言いたい事がわからず、曖昧な相槌が口から零れる。

「それと同じようにね、私は幼馴染って関係を大事にしすぎていたんだと思う」

話が見えない。

しかし、ただの雑談ではない事だけは分かった。

霧香の言葉にじっと耳を傾ける。

「だから、ここに捨てようかなつて」

理解が追い付かない。

俺は困惑したまま、何かを言おうとする霧香を見つめる事しかできなかつた。

「ねえ、竜也」

そう言つて、霧香は微笑んだ。

「私、竜也のこと好きだよ」

霧香の双眸がまっすぐと突き刺さる。

恥じらう様子も、言葉を誤魔化す様子もなかった。

ただ真正面から真意を伝えようとする強い意思だけが見えた。

「竜也はどうか。私のこと、意識してくれた事はある？」
意識。

俺たちは多分、互いに意識していたのだろう。

だから一時的に疎遠になった。避けるようになった。

けれど、もうそんな事に意味はない。

すべてが過去のことだった。

「霧香……俺は、先輩と付き合う事になって……」

「知ってるよ。でも私が知りたいのは、私のことを意識した事があるのかっていうこと。そこに先輩は関係ないでしょ」

霧香は引き下がらない。

まっすぐと自分の想いを伝えてくる。

ならば、俺も正直に答えるべきなのだろう。

嘘や誤魔化しの言葉を吐くべきではない。

一瞬の逡巡の後、俺はゆっくりと口を開いた。

「……意識した事は、あるよ。もしかしたら初恋だったのかもしれない」

当時、はつきりと自分の気持ちを掴む事は出来なかった。

けれど、今なら分かる。

疎遠の原因になったのは、幼い恋心だった。

俺たちはまだまだ子供で、それを上手く扱えなかった。

それは多分、今でもあまり変わらない。

だから、こんな状況になってしまっている。

「そっか」

霧香は呟くように言って、ゆっくりと視線を外した。

諦めるような力ない笑みで、自嘲するように言葉を続ける。

「もっと早く伝えてたら、私が竜也と付き合ってたのかな」

そうかもしれない。

俺がもう少し大人になれていたら、そういう未来もあったのかも
しれない。

けれど、それは口に出さなかった。

多分それは、先輩への裏切りになってしまう。

「そっか、そっか」

霧香は一人で呟き続ける。

そして、自分自身に確かめるように言った。

「——じゃあ、別に引き下がる必要ないよね」

言葉の意味を理解できなかった俺は、ただ霧香の事を見つめる事しかできなかった。

霧香は先ほどまでと違って自信に満ちた微笑を取り戻していた。

「ただの順番の違いでしかなかったってことでしょ。だから、諦めるには早いかなって」

それに、と霧香は笑う。

どこか残酷な印象を受ける冷たい笑みだった。

「私はこれまで多分、無意味な駒を大事にしすぎていたんだと思う。大事な駒ほど切った時の効果が高いのに、それを理解してなかった。ずっと大事にしようと思っていた」

ようやく分かったよ、と霧香は言った。

「どんな駒でも、捨てるタイミングがあるんだ。だから、順番に捨てていくよ。そうすれば変わる気がする」

次の瞬間、霧香の身体がふわりと舞った。

唇に柔らかいものが触れ、甘い香りが鼻腔をくすぐる。

一瞬の出来事だった。

身体を離れた霧香が、どこか勝ち誇ったように頬を綻ばせる。

「順番の問題なら、これで私のほうが上かな？」

呆気に取られていた俺は、動揺を隠すように一步下がって抗議の言葉をお口にしました。

「……霧香、こういうのは互いの同意の上で手順を踏むべきで——」

「ごめんね」

遮るように霧香が口を開く。

「ごめん。でも、これ以上後悔したくないから」

だから、と霧香は悪びれる様子もなく宣言した。

「先に謝っておくよ。私はもっと酷い事をするかもしれないけど、それは多分必要な事だから」

11話

翌日の授業はずっと上の空だった。

告白の言葉。唇の感触。

俺はそれを、上手く自分の中で受け止める事が出来なかった。先輩と付き合っている以上、霧香の想いは断るしかない。なのに、霧香は自分からそれを口にした。

ここで区切りをつけたかったのだろうか、とはじめは思った。けれど、霧香はこうも言った。

「——じゃあ、別に引き下がる必要ないよね」

自信を取り戻した顔で、悪びれる様子もなく。

「ただの順番の違いでしかなかったってことでしょ。だから、諦めるには早いかなって」

そう宣言した霧香は、どこか危うい雰囲気を纏っていた。

だから、すぐに霧香の家を出た。

俺たちには冷却期間が必要だと思った。

適当な理由を口にして部屋を後にする俺へ、霧香はいつも通りの笑みを向けていたように思う。

それが更に違和感となつて、俺の心の中に滞留していた。

霧香の考えが読めない。

幼少期からずっと一緒だったのに、彼女が何を考えてあんな事をしたのか理解できない。

考えがまとまらない内に全ての授業が終わり、放課後がやってきた。

重い足取りで部室へ向かう。

戸口を開けると、すでに四季さんがいた。

「やあ」

微笑む先輩は、どこか照れるような仕草が見え隠れしていた。付き合う事になって、はじめての部活。

部室で二人きり。

本来なら俺も、この状況を意識していたのだろう。

しかし今は、霧香の事が気がかりでそれどころではなかった。

「早いですね」

声をかけながら、鞆を教壇の上に置く。

四季さんの前には既に盤面がセットされていた。

「今日が楽しみだったんだ。考え方によつては部活もデートのようなものだからね」

四季さんはどこか浮ついた様子だった。

霧香の事を相談するべきか迷いながら、曖昧な笑みを返す。

相談するにしても、どこまで話すかが問題だった。

キスされた、という事まで話せば霧香と四季さんの間で深刻な亀裂が生じるだろう。

不要な争いを引き起こすだけなら、自分の胸に留めておくべきか。そんな事を考えた時、戸口の開く音が響いた。

「こんにちはー」

顔を見せた霧香は、いつも通りの様子だった。

俺は少し面食らった後、出来るだけ平静を装って言葉を返した。

「……霧香……指しに来たのか？」

「ん、違うよ。ただ、昨日のお礼言いたかっただけ」

場の空気が、凍った気がした。

四季さんの双眸が、じつと観察するように俺たちへ向けられる。

「お母さんね、久しぶりに竜也に会えて喜んでたよ。お父さんも懐かしがってたし」

「……ああ」

短く言葉を返す。

出来るだけ不要な言葉を言わないように。話が広がらないように。「後ね、昨日のプレゼントいらなかったら別に捨てて良いからね？」

言いたかったのはそれだけ」

じゃあね、と霧香はすぐに部室から出ていった。

引き戸が閉まり、静寂が訪れる。

四季さんの冷たい声が、すぐにそれを破った。

「竜也くん。どういう事かな」

振り返ると、四季さんが椅子から立ち上がった。

「私はこう言ったはずだ。例えば幼馴染であっても、女子の家に行くのは辞めて欲しい、と。君はそれを了承して、私の前で断りの連絡を入れたはずだろう」

なのに、と四季さんの声が一段と低くなる。

「私に黙って、彼女の家に行ったのか？」

「……霧香の両親とも昔から面識があつて、久しぶりに会いたいという話になって……顔をみせるだけのつもりで……」

「そういう事情なら、一言くらい相談してくれても良かっただろう。私だって無茶なことを言うつもりはない。面倒臭い女だから黙っておこうとでも思ったのか？」

「ち、違います。本当にただ霧香の家に寄って、少し立ち話するだけのつもりで……」

下心なんて一切なかった。

霧香の両親には昔からお世話になっている。だから無下に出来なかった。それだけだった。

なのに、先輩に説明すればするほど言い訳がましくなっていく。

「それで、立ち話だけで終わったのか？」

「いえ、リビングで少し談笑して、それで昔話になって、それを恥ずかしがった霧香に連れられて、その、結局部屋に行きました」

先輩の双眸が、徐々に鋭くなっていく。

「さっき話していたプレゼントと言うのは？」

「詰め将棋の本です。本屋で見つけたからっていうだけで、あの、特に深い意味のものじゃなくて」

「わかった」

そこで先輩は一度、話を切った。

小さく息を吐き、それで、と俺を睨む。

「他に隠し事はないだろうね？」

心臓が、とくん、と跳ねた。

どう考えても避けられない問題だった。

視線が泳ぐのが自分でもわかった。

「あの」

場を繋ぐように、無意味な言葉が口から飛び出した。喉がカラカラに乾き切っていた。

「前から好きだったと、告白されました」

先輩の目が大きく見開かれる。

驚きで、怒りの表情が消えていく。

なのに俺は、更に言葉が続けなければならなかった。

「その後……キスもされました。でも、あの、すぐに断って、そのまま帰りました」

沈黙が落ちた。

俺はそれ以上言葉を続けられず、先輩はもう何も言わなかった。

心臓の部分が軋むように痛み、自分の呼吸音が妙に大きく聞こえた。

まだ春なのに背中の中のシャツがべったりと汗で濡れ、体温を奪っていた。

俺たちはそのまま、随分と長い間動けなかった。

最初に沈黙を破ったのは先輩だった。

「おかしいじゃないか」

絞り出すような声だった。

「私たちが付き合い始めたのは一昨日だ。まだ三日目だ。なのに何故、こんな浮気を問い詰めるような真似をしなくちゃならないんだ」

「……四季さん、本当に——」

「いいんだ」

俺の言葉を、四季さんが遮る。

「竜也くんはその気がないのは分かっている。しかし結果的にそうになった。竜也くんが異性に対して認識が甘かったからだ」

四季さんはそこで息をついて、思案するように目を閉じた。

それから、ゆっくりと口を開く。

「報告制にしよう」

告げられた言葉を、俺は理解する事が出来なかった。

「報告制？」

「互いに異性と二人きりの状況になった時は必ず報告するようにしよう。一切の例外は認めない。もちろん、飛山さんの家族も対象だ」

意味を咀嚼している間に、四季さんが言葉を続ける。

「行事で女子と二人きりになったら、そういう時は必ず連絡するようにして欲しい。これなら竜也くんの認識が甘くても、私の方で制止する事が出来る」

徐々に意味を理解する。

つまり、知らない所で異性と接触するという不安をなくしたいのだろう。

四季さんがそれで安心出来るなら、それも良いのかもしれない。

「それと」

四季さんの声が、再び冷たいものになる。

「飛山さん以外に仲のいい女子はいるのかな？」

「……霧香みたいに二人つきりで遊んだりとかは、いません」

「質問を変えよう。飛山さんの次に仲がいい女子は？」

「……霧香の友達の、銀原さんです。でも本当に霧香繋がりというだけで、そんなに仲がいいわけでは……」

とにかく、と四季さんが俺の言葉を遮る。

「とにかく、誰かと二人きりになるような状況の時は私に連絡するよ。うに。異論はないだろう？」

「……はい」

そういうつもりがなかったとは言え、今回のことは全面的に俺に落ち度があった。

異論を挟む余地などなかった。

「それと最後にもう一つ」

四季さんはそう言って、ゆっくりと俺の方へ近づいてきた。

怒られるのかと思った。

身を硬くする俺に対し、四季さんが微笑む。

次の瞬間、唇が軽く重なった。

「飛山さんとしていて、彼女である私としていないのはおかしいだろう？」

そう言い切る先輩は、どこか吹っ切れた顔をしていた。
部室で待っていた時のやや照れた様子は消え去り、まるで別人のようだった。

それが一抹の不安として、俺の心の中に水溜まりのように残った。

12話

居玉は避けよ、という将棋の格言がある。

玉を初期配置のまま放置するのは良くない、という意味だ。

しかし、将棋の初学者にこの言葉を送ってもあまり意味をなさない。

現状が良くない、と分かっているにもかかわらず具体的などう動けば良いのか分からないからだ。

良くない状況だと分かっているながらも、打開策が分からずにそのまま押し切られる。敗ける時は大体そういうものだ。

俺はいま、それと同じ感覚に包まれていた。

霧香との拗れた関係を放置してはおけない。

どう考えても話し合いが必要だった。

しかし、それには四季さんとの約束が枷となっていた。

霧香と二人きりのところを見つかれば、間違いなく誤解されるだろう。

現状維持は避けなければならないのに、解決策が見つからない。

「ねえ」

不意に声をかけられ、顔をあげる。

机の前に、同じクラスの銀原さんが立っていた。

「ちよつと良い?」

「ああ、うん。いいよ」

答えながら、反射的に周囲を見渡す。

最後のホームルームが終わったばかりの教室。

まだ人が多い。四季さんに報告が必要な状況ではない。

「霧香の事なんだけど」

銀原さんはそう言って、空いている隣の椅子に腰かけた。

それから声をやや落として言葉が続けた。

「昨日からちよつと様子おかしくない? 金城くんなら何か知ってる
と思つて」

うまく言葉が出なかった。

言葉に詰まった俺を見て、銀原さんが微笑む。

「ああ……やっぱり金城くんが原因なんだ？」

銀原さんは俺の顔を下から覗き込むように、机にもたれかかった。それから悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「何があつたか当ててみようか」

そうだな、とわざとらしく考えるような素振りを見せながら銀原がゆっくりと口を開く。

「たとえば」

一瞬の間。

銀原さんの目が、俺の表情を観察するようにじっと向けられる。

「霧香が告白したとか？」

「いや——」

霧香の名誉のために反射的に否定しようとするも、うまい言い訳が思い浮かばず後が続かなかった。

それを見た銀原さんが笑みを深くする。

「金城くんは嘘が下手だね」

思考も言葉もまとまらず黙り込む俺に、銀原さんが言葉が続けた。

「それで、金城くんは霧香を振ったわけだ？ 付き合いが長くて、いまさら女として見れなかつたとか？」

「……その前日に、先輩と付き合う事になったんだ」

「——え？」

それまでどこか楽しむような表情をしていた銀原さんの顔が固まる。

予想外の答えだったのだろう。

「だから振つたというのは少し違うかな。それを踏まえた上で一方的に告白されただけだよ」

「……それは随分と……霧香らしいね」

銀原さんが言葉を選ぶように言う。

「霧香は多分、時間が経てばいつも通りに戻ると思う。だから心配な
ふゆ」

思ってもない事を口にして、俺は話を切り上げた。

気づけば、教室には俺と銀原さんしか残っていない。

これ以上話を続けければ、先輩にバレた時に面倒な事になる。

「じゃあ、俺はいくよ」

鞆を手にとつて立ち上がる。

「あ、私も帰る」

後ろから銀原さんがついてくるのが分かったが、意識的に足を速めた。

一緒にいるところを先輩に見られたくない。

そう思つて教室を出た途端、一番聞きたくない声が耳に届いた。

「竜也くん」

自然と足が止まった。

廊下の壁に背中を預けるように、先輩が立っていた。

「遅いから様子を見に来たんだ」

先輩はそう言つて笑みを浮かべたが、その目は笑っていなかった。

「念のため、様子を見に来て良かったよ」

壁に預けていた背中を起こし、先輩が近づいてくる。

「部室、行こうか」

「……はい」

表には出さないが、怒っているのが分かった。

自然と返事が小さくなる。

「その人が、金城くんの彼女さん？」

背後から飄々とした声が届く。

振り返ると、銀原さんが興味深そうに先輩を見ていた。

「綺麗な人だね」

先輩が不審そうな顔で銀原さんに視線を返す。

銀原さんは上級生相手に怯む様子もなく、にこやかに自己紹介を始めた。

「金城くんと同じクラスの銀原です。霧香の友達もやってまあす」

先輩は一瞥だけして、すぐに興味なさそうに踵を返して部室に向かい始めた。

「じゃあ」

銀原さんに一声かけて、先輩の後を追う。

「また明日ね」

後ろから銀原さんの声。

先輩の足がやや速くなる。

銀原さんから十分に離れると、先輩が口を開いた。

「彼女とは仲が良いのか？」

いつもより低い声だった。

先輩の視線は前を向いたままで、表情が見えなかった。

「霧香繋がりでたまに話す程度です」

「そうか」

部室につくと先輩は鞆を下ろしながら、それで、と俺に目を向けた。

「竜也くん、昨日の約束を覚えているか？」

「……はい。あの、すみません」

「他の女子と二人きりになるのはやめてくれ、とは言わない。ただ報告して欲しい、と言っただけだ。これはそんなに難しい事かな」

「いえ……少しだけ話すつもりだけだったんです。ただいつの間にか周りが帰っちゃってて」

「そうか」

先輩は小さくため息をつく、駒を並べ始めた。

俺もそれに倣って散らばった駒を手取る。

「良くないな」

不意に先輩が零した。

「こういうのが良くないのは分かっているつもりだ。ただ、少し……不安だね」

「そんな……約束を破った自分が悪いです。先輩は何も悪い事なんて」

先輩は小さく笑って、指そうか、と盤面に目を向けた。

それからは暫く無言の時間が続いた。

駒と盤面が擦れる音だけが部室に響き渡る。

窓から夕陽が差し込みだした時、先輩が沈黙を破った。

「罰則のない約束は、あまり意味がないと思わないか」

思わず顔をあげる。

先輩は盤面をじっと見つめたまま、表情をうかがう事が出来なかった。

「何か罰を作れば、もう少し真剣に約束を守ってくれるかな、と思ってね」

「……どういう罰ですか？」

恐る恐る問いかけると、先輩はゆつくりと顔をあげた。

予想に反して、先輩は微笑んでいた。

「冗談だよ。そういう息苦しい関係は長続きしないだろう。私だってそれくらい心得ているさ」

安堵すると同時に半分は本気なのだろう、と思う。

「……ごめんなさい。次から気を付けます」

「ああ、明日からそうしてくれ」

先輩が王手をかけ、小さく息をつく。

「今日はこれくらいにしようか」

「はい」

俺が駒を片付けている間、先輩は何かを考えるように窓の外を見ていた。

そして、不意に口を開く。

「竜也くん」

「はい」

「今度の休み、どこか遊びに行かないか？」

突然の誘いに、一瞬だけ間が空いた。

先輩が補足するように言葉を続ける。

「思えば、デートらしいデートをしてないと思ってね。どうかな？」

「……自分から声をかけるべきでした」

もっと早く俺から声をかけていれば先輩の不安も払拭出来ていたかもしれない。

「決まりだな。明日の部活で話し合おう」

「はい」

頷いてそのまま先輩を並んで部室を出る。

帰りの先輩は普段と変わらない様子に戻っていた。

それに安堵し、いつものように駅前で別れる。

その直後、スマホが短く震えた。

駅で確認すると、銀原さんからメッセージが届いていた。

『何か悩み事あるんじゃない？ 相談乗るよ？』

13話

銀原桂子という少女は、クラスの中で目立つ存在だった。

場の空気やグループ間の隔たり、男女の溝。

彼女はそういったものを無視して行動する。

誰にも怖気づかないし、誰にも壁を作らない。

彼女は思ったことをそのまま口にする。

その性格が災いして、一年生の時にソフトボール部の先輩たちとトラブルになったと聞いたことがあった。

発端は練習メニューについてだった。

一年生は体力作りと雑用がメインになっていて、銀原さんは週一でも良いから練習させて欲しいと頼んだらしい。

先輩たちはその提案を受け入れず、そして銀原さんは先輩たちを罵った。

結果、ソフトボール部で乱闘騒ぎが発生した。

その間も銀原さんは複数人の先輩を相手に一度も引かなかったと聞いている。

そのせいで銀原さんはクラスで暫く腫物扱いされる事になったが、その後は大きなトラブルもなく平穏な学園生活を送っている。

思った事をそのまま口にしてしまうだけで、きつと悪い人ではないのだろう。

霧香繋がりで話すきっかけも多く、それは理解しているつもりだった。

銀原さんは言葉を曖昧に濁したりしない。

それはトラブルの種にもなるけれど、悩み事の相談相手としては意外と適しているかもしれないと思った。

『何か悩み事あるんじゃない？ 相談乗るよ？』

彼女からのメッセージを保留したまま家に帰ると、次のメッセージが届いていた。

『今日、彼女さんと揉めてなかった？ ちよつと空気悪かったよね』
小さく息を吐きだす。

あの場にいたのだ。今さら隠す必要もない。

『約束を破った事について怒られてただけだよ』

メッセージを送信した直後、着信が鳴った。

銀原さんからだった。

逡巡した後、通話に出る。

すぐに銀原さんのあつけらかなとした声がした。

『金城くん？ いきなりごめんね。通話した方が早いかなくて。いま

時間大丈夫？』

「ああ。今帰ったところだから大丈夫だよ」

『あ、本当？ それでさ、ちよつと気になったんだけどさ——』

そこで一拍置いて、銀原さんは確信めいた言い方をした。

『——金城くんの彼女さんって束縛が強い感じなの？』

一瞬、返答に詰まった。

束縛。

あまり使いたくない言葉ではなかった。

そもそも、発端は霧香と二人きりの状況を作った自分にある。

四季さんを責めるのは筋が違う。

沈黙を肯定と受け取ったのか、銀原さんが小さく笑い声をあげた。

『あー、やっぱり束縛強いタイプなんだ？』

「……それはちよつと違うかもしれない。俺が約束を破って不安にさ

せたのが原因だから」

『ふーん。約束って？』

「他の女子と二人きりになる時は連絡して欲しいっていうのを俺が

破った」

向こう側で銀原さんが笑う気配。

『なにそれ。約束破る前から束縛されてるじゃん』

「いや。それも元々、他の約束を破ったのが原因で……」

『へえ。でも、その初めの約束すら行動を束縛するようなものだった

んじゃない？』

霧香との約束をキャンセルして欲しい。

それは確かに束縛だったかもしれない。けれど、恋人としては当然

の要求だった。

異性の家に恋人が行くのは不安で当然で、俺の行動の方が不義理だったのだと思う。

しかし、銀原さんにどこまで詳しく明かすべきか悩み、言葉に詰まった。

その間に銀原さんが言葉を続ける。

『当ててみようか。金城くんは自分が悪いと思ってるでしょ』

たまに、銀原さんの事を苦手だと感じる事がある。

普通は踏み込まない所に、彼女は遠慮なく踏み込んでくる。

ただのクラスメイトであるとか、霧香繋がりの関係でしかないとか、彼女はそういう関係性を無視する。

普通は思っても言わない事を、彼女は口にしてしまう。

『それで、罪悪感を覚えてる時を狙って彼女さんは約束を追加してきたんじゃない？ 無意識に他人をコントロールするタイプだ。放っておけばどんどんエスカレートしていくよ』

銀原さんの言葉を否定できなかった。

次に約束を破った時にそうなるであろう事が容易く想像できてしまった。

『そういうのはね、そのまま放っておくのは良くないよ。先延ばしにしても破綻するだけだからさ』

「……なにか、解決策が？」

電話口の向こうで銀原さんの笑う気配。

『——簡単だよ。正直にうざいって言えば良い』

軽やかな口調だった。

何でもない事のように、当然のように。

『うざい事をうざいって言わないからエスカレートするんだよ、金城くん。言ってやればいいでしょ、うざいって』

「……それは……銀原さんだったら言えるかもしれないけど」

何にだって言い方というものがある。

間違いなく喧嘩になるだろう。

『言えないってだけで、うざいとは思っているんだ?』

「……さつきも言った通り、俺が原因でもあるから。そんな事は思っ
てないよ」

『ふーん。でも今のまま放っておいてもどこかで破綻すると思うけど
なあ』

銀原さんのつまらなさそうな声。

「……銀原さんみたいにはつきりと意思を伝えられたら、喧嘩は多く
なるかもしれないけど拗れる事はないのかもしれないね」

ちよつとした力関係。今後の関係性を踏まえた配慮。何となく言
いそびれた言葉。

そういうものが積み重なって、人間関係は捻じれていく。

単純だったものが不必要に複雑化して、絡まったコードみたいにな
っていく。

銀原さんのような性格は周囲との衝突は多いだろうけど、結果とし
ては上手くいくのかもしれない。

『んー、金城くんは私と同じタイプと思ってたけど?』

「え?」

銀原さんと同じタイプ。

そう言われてもピンと来なかった。

『一年生の時、将棋部がないからって自分で部活を立ち上げたよね。
部員なんて幽霊ばかりでまともに活動してるのは霧香しかいないし。
部活の立ち上げだけでも目立つのに、男女二人だけなんて余計に目立
つでしょ。だからさ、あんまり周囲の目を気にしないタイプなんだ
なって思った』

「……やりたい事だったからね」

『同じ事だよ。言いたいと思った事はその場で言えば良いんだ。その
方が面倒が少なくて済むんだから』

さて、と銀原さんが笑う。

『本音出してみなよ。今後、ずっと女子と二人きりになる度に連絡し
ないといけないんでしょ? ずっとだよ。それをうざくないって言

うのは嘘だよ。違う?』

「……それは……何とか出来るに越したことはないけど」

『決まりだね。じゃあ、私が何とかしてあげるよ』

一抹の不安が沸き起こる。

けれど、何となく大丈夫だと思ってしまう。

銀原さんは霧香の友人だったし、彼女が相談に乗ろうと持ち掛けてきたのは善意だろうから。

だから、次の日に起きた出来事は何もかもが俺の想定外の事態だった。

放課後。

俺と四季さんしかない部室。

そこに突然入ってきた銀原さんは、開口一番にこう告げた。

「金城くん、先輩の事をうざがってるみたいですよ。先輩、知ってました?」